「いのちの便り」を読む
－戦地と内地を繋いだ軍事郵便の読み解きを事例に－

クラーク記念国際高等学校
八田　友和

１　実施学年及び教科・領域

高等学校 第３学年 地理歴史科 日本史探究（特設単元）

＜高等学校と専修学校の併修システム＞

今回、授業実践を行った専修学校クラーク高等学院姫路校は、連携校「クラーク記念国際高等学校」との併修システムを採用している。これにより、専修学校に在籍しながら、高等学校の面接指導や報告課題、定期試験を受けることができる。そのため、専修学校の「一般的な学び」や「専門的な学び」を受けつつ、高等学校での進級・卒業に向けた学習も同時並行で可能となる。よって本実践を受講した生徒は、専修学校クラーク高等学院姫路校の生徒であると同時に、クラーク記念国際高等学校の生徒ともいえる。そこで、本稿では両校を併せて「クラーク姫路校」と表記する。

２　学習のねらいと博物館の活用との関連について

（１）　単元名「いのちの郵便に込められた思いを読み解く」

（２）ねらい

① 学習指導要領との関連

『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説－地理歴史編－』（以下、『指導要領－地理歴史編－』）日本史探究の「（３）近現代の地域・日本と世界の画期と構造」において、「戦時体制の強化と第二次世界大戦の展開については，戦争の推移と国民生活への影響などに着目して，日中戦争が長期化した経緯などについて，推移や展開を考察するための課題（問い）を設定し，戦争の勃発とその長期化について，欧米諸国との外交関係の変化とも関連付けて確認するなどの学習が考えられる」とある。（下線筆者加筆）

そこで本研究では、下線を踏まえた授業を展開する際、軍事郵便や慰問文を教材として取り上げる。戦地の兵士と国内の家族・知人を結んだ唯一のコミュニケーションツールである軍事郵便を読み解くことで、下線部はもちろん、「戦地と国内の戦争体験の共有」「当時の人々が残した記憶（記録）を後世に伝える意味」について考えたい。

② 単元の目標

ア）軍事郵便や慰問文から、戦争の推移と国民生活の実際について理解することができる。

イ）戦争遂行や戦地と国内の戦争体験の共有に軍事郵便が果たした役割について理解することができる。

ウ）当時を生きた人々が残した記憶（記録）を後世に伝える意味や意義について、自分の言葉で説明することができる。

エ）軍事郵便の読み解きを通じて、資料の扱い方や資料読解の方法について理解することができる。

（３）博物館との関連

① 活用方法：非来館型活用

② 活用資料

○ 歴博 第６展示室（展示物・パネル）

○ 軍事郵便（個人蔵）

○ 絵葉書（個人蔵）

○ 慰問作文（個人蔵）

○ 出征兵士を送る送辞（個人蔵）

○ 召集令状（個人蔵）

○『国立歴史民俗博物館研究報告』『総合誌歴博』『展覧会図録』

・国立歴史民俗博物館（編）『国立歴史民俗博物館研究報告第 126 集 近代日本の兵士に関する諸問題の研究』2006 年

・国立歴史民俗博物館（編）『国立歴史民俗博物館研究報告第 131 集　佐倉連隊と地域民衆』2006 年

・国立歴史民俗博物館（編）『国立歴史民俗博物館研究報告第 147 集　戦争体験の記録と語りに関する資料論的研究』2008 年

・国立歴史民俗博物館（編）『総合誌歴博 189 軍事郵便と戦争・兵士』2015 年

・国立歴史民俗博物館（編）『佐倉連隊にみる戦争の時代』2006 年

（４）本実践で活用した資料について

本実践では、国立歴史民俗博物館（以下、「歴博」と表記する）が発行した『国立歴史民俗博物館研究報告』（以下、『研究報告』と表記する）、『歴博総合誌』（以下、『総合誌』と表記する）、『国立歴史民俗博物館展覧会図録』（以下、『展覧会図録』と表記する）および第６展示室の展示を取り上げ、教材研究・授業開発を行った。

そもそも博学連携は、「博物館と学校とが望ましいかたちで連携・協力し合いながら、子どもたちの教育を推し進めていこうとする取り組み」[1)]と定義でき、部活動や課外活動での実践も含む広範な教育活動と捉えることができる。特に、学習指導要領において博物館の活用が求められていることから、授業をはじめとした教科指導における活用が積極的に図られてきた。例えば、公益財団法人日本博物館協会が編集した『子どもとミュージアムー学校で使えるミュージアム活用ガイドー』では、博物館内で利用できるサービス（来館型のサービス）として、「無料の配布物」「書き込み可能なワークシート」「オリエンテーション」「展示解説」「その他」、学校で活用できるサービス（非来館型のサービス）として「資料貸出」「出前授業」が紹介されている[2)]。とりわけ 2002（平成 14）年に施行された学習指導要領において「総合的な学習の時間」が創設されてからは、教員が授業をおこなう際に利用・活用できるサービスの拡充や博物館による学校の支援が積極的に図られるようになり、博学連携の実践事例が全国各地で蓄積された。従来おこなわれてきた先行授業実践からも明らかなように、博物館を活用する最大のメリットは「所蔵資料（モノ資料）」と「専門的知識（学芸員）」だと感じている。しかし、博物館にはモノ資料だけでなく、多様で大量の情報を有する「博情館」の側面も併せもっていると感じている[3)]。そして、博物館が有する情報（研究成果、最新情報など）は展示や教育普及、刊行物として社会に還元されている。しかし、各地の博物館が発行している『研究紀要』『年報』『研究報告』といった研究成果が教員の手元に届き、教材研

究や授業開発に用いられることは少ないのではないだろうか[4)]。

一方で、探究学習の導入に伴い、生徒自身が様々な情報にアクセスし、収集することが求められている。例えば、日本史探究の教科書では、「情報の収集」を行う手段として博物館の活用が紹介されている。そのため、近隣の博物館にとどまらず、展覧会図録や研究紀要、ホームページなどを介して、様々な博物館から情報を収集することが求められている。

そこで本実践では、歴博が発行した『研究報告』『総合誌』『展覧会図録』の活用を組み込み込んだ授業開発を試みる。歴博には軍事郵便を専門に研究されていた新井勝紘先生が在籍しておられたこともあり、軍事郵便に関する研究が豊富に蓄積されている。加えて、第６展示室には「軍事郵便」こそ展示されていないものの、佐倉連隊を事例に本実践で扱う範囲の資料が網羅的に展示されている。それらの資料を活用することで、入営から戦地での軍務までを市民（兵士）の視点から確認できると考えた。

（５）指導観

今回、本実践を行うクラスは、クラーク姫路校３年生の生徒 36 名である。入学当初から在籍している生徒が大半を占めるものの、年度途中に転入してきた生徒も３分の１ほど在籍している。卒業後の進路（希望ないし予定）としては、大学が最も多く、次いで専門学校である。例年、ほとんどの生徒がいわゆる推薦入試で進路を決めるため、受験科目として社会系科目を使用する生徒は少ない。

一方で、生徒が普段取り組んでいる課題（通信制高校の進級に必要な全国共通の報告課題）は、共通テストや一般入試などを意識して、思考力・判断力・表現力を問う問題が多く設定されている。そのため、受験対策ではないものの、思考力・判断力・表現力の育成を意識した授業構成が求められている。そのため、多種多様な資料や情報を有する博物館と連携することは、生徒の資質・能力を向上させるうえで、有効な方策になり得ると考えた。

本実践では、軍事郵便を主な教材として活用する。軍事郵便についての説明は、下記を参照いただきたい。なお、本実践における「軍事郵便」の定義は下線部分とする。

軍事郵便とは

軍事郵便とは、<u>戦地もしくはそれに准ずる地に派遣されている軍隊や軍艦、軍人・軍属から出された郵便物、およびそこに宛てた郵便物</u>を指す。書状や葉書だけでなく、戦地に送られた定期刊行物、郷土通信などの印刷物、小包なども含まれる。戦地からのものは無料、戦地に送る側は有料であり、これで収支の一部が補われた。（中略）開戦となれば陸軍の場合、戦地に野戦郵便局が設置され、派遣部隊と内地の郵便局を繋いだ。（中略）日中戦争が始まった 1937 年から 1941 年までは年間4億通程度で推移した。戦場と内地・郷里・家族を大量の郵便物が繋ぎ、安否の確認、情報の交流、そして戦地への鼓舞、士気高揚がおこなわれ続けたのである

（出典）荒川章二「歴史資料としての軍事郵便の可能性」『歴博』第 189 号，2015 年，p.1 を参照、下線筆者加筆

また、生徒に行った簡単な聞き取り調査においても、「近隣の博物館や図書館を利用したことがない」「最後に利用したのが小学生の時」と回答する生徒が多く確認できた。そのため、学習過程において地域の博物館の展示見学も組み込むこととした。

３　指導計画（全９時間）

（１）歴史資料の扱い方・資料読解の方法（３時間）

過程	時数	○学習活動及び内容	□指導上の留意点 ■評価の観点
事前学習	３	○絵葉書、軍事郵便をはじめとした歴史資料を取り上げ、資料の扱い方や資料読解の方法について学ぶ。	■学びに向かう力 ■思考・判断・表現 ■知識・技能

（２）兵庫県立歴史博物館の見学（３時間）

過程	時数	○学習活動及び内容	□指導上の留意点 ■評価の観点
博物館での授業	３	○ 兵庫県立歴史博物館の見学を通して、資料を守り伝えてきた博物館や学芸員の存在や、博物館が収集した資料がどのように展示され、何を伝えようとしているのか考える機会を設ける。	■学びに向かう力 ■思考・判断・表現 ■知識・技能

（３）市民が兵士になる（１時間）

過程	時数	○学習活動及び内容	□指導上の留意点 ■評価の観点
第一次	１	○ 市民が兵士になる過程を、歴博第６展示室や図録を用いながら解説する。その際、「兵士＝職業軍人」と捉えている生徒の既有知識に揺さぶりをかける。	■学びに向かう力 ■思考・判断・表現 ■知識・技能

（４）兵士たちが置かれた環境（１時間）

過程	時数	○学習活動及び内容	□指導上の留意点 ■評価の観点
第二次	１	○ 出征した戦地の気候・環境、兵士の様子について調べる。どのような環境下で軍務にあたっていたのかを、地域ごとに明らかにする。	□前時の学習内容を確認することで、既有知識の想起を行う。

（５）軍事郵便を読んでみよう！（１時間）

過程	時数	○学習活動及び内容	□指導上の留意点 ■評価の観点
第三次	１	○ 軍事郵便の概要を説明したうえで、一人一通軍事郵便を読み解き、兵士や家族がどのような思いをもって手紙を書いた（受け取った）のかを考える。 キーワード：戦地と内地の戦争体験の共有	□資料に触る際の注意点を伝えることで、資料の扱い方についても考えさせる機会としたい。

４、実践の概要（歴博の資料・情報を活用した実践）

ここでは、個人蔵の資料（軍事郵便や慰問文）および歴博の展示や刊行物（『研究報告』・『総合誌』・『展覧会図録』）を活用した授業実践について整理・提示する。

（１）事前学習（博物館を知る・軍事郵便の読み解き）（３時間）

日本史探究の授業では多様な資料に触れていくことを生徒に伝えたうえで、「資料を扱う練習」「資料から情報を読み取る練習」をおこなった。具体的な手順は表１の通りである。

（表１）資料に触れる前の準備

手 順	指示内容
1	机上の整理整頓（鉛筆・消しゴム以外は、カバン・ロッカーにしまう）
2	身に付けているものを外す
3	机と机の隙間をなくす
4	手指の簡単な洗浄
5	注意事項（①資料を優しく触ること、②机と机の間に資料を置かない など）を伝える

手順１～５までを終えたうえで、一人一枚絵葉書（書き込みされていないもの）を手渡した。その際、筆者が作成した資料記録用紙も手渡している。この記録用紙は、実際に博物館で使用されている記録用紙を参考に筆者が作成した用紙であり、「調査年月日、調査者、資料番号、資料名称、作成年、作成者、形態、法量（縦×横×高さ）、数量、収蔵場所、受入方法、受入年月日、受入先、内容及び備考」が記録できるようになっている。そのため、ただ資料を観察するだけでなく、学芸員がおこなう作業を疑似体験しながら資料の記録および読み解きをするように指示を出している。生徒には絵葉書から下線部分（調査年月日など）の情報を読み取り、記録用紙にまとめてもらった。作業が終わった生徒には、薄葉紙を使って資料を保護し、記録用紙と一緒に提出するように指示を出した。

次に、大正から昭和にかけて活躍した兵庫県議会議員に関係する葉書（個人蔵）を生徒に手渡し、情報を読み取ってもらった。先ほどの絵葉書とは異なり、「受取人・差出人・住所・メッセージ」など、多くの情報がまとめられていることに加えて、「達筆なもの」「旧字体で書かれているもの」が多く、容易に読み解くことができなかった。そのため、グループをつくり、協力して読み解きをしてもらった。読み解きの流れは、絵葉書を読み取った時と同様の流れである。なお、机間支援を行う際、「博物館（学芸員）も同様の仕事をしていること」「学芸員は一見して読み取れない文字も辞書を使って読み解いていること」などを伝え、博物館や学芸員の役割・存在意義について考えてもらうきっかけづくりをおこなった。生徒からは、「博物館の仕事をはじめて知った」「学芸員って大変！」「最初は楽しかったけど、何枚もするってなったら大変…」などの感想が寄せられた。

本時の最後に軍事郵便を配布し、どのような情報がまとめられているか大意を把握してもらった。この時点ではあえて“軍事郵便”というキーワードだけ伝え、軍事郵便制度や詳細は伝えていない。

なお、「事前学習」の部分は拙稿「博物館機能の疑似体験を通じて資料に込められた思いを読み解く実践（『リカレント研究論集』第４号,2024 年,pp.76-89 収録）」においても同様の取り組みを紹介している。

（２）資料を守り伝えてきた人の存在を考える（３時間）

事前学習を踏まえ、博物館や学芸員の存在について触れる機会を設けた。具体的には、兵庫県立歴史博物館（以下、「県立博物館」と表記する）の見学を行うなかで、博物館が収集した資料がどのように展示されているのか、何を伝えようとしているのかを考える機会を設定した。

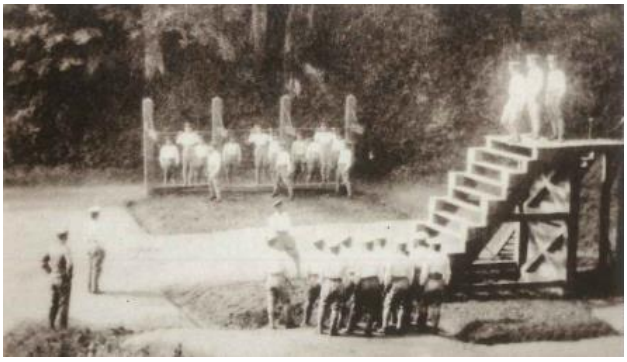
まず、県立博物館が作成したワークシートを用いて、常設展示を見学してもらった。県立博物館には、姫路城や地域の祭り、こども文化を紹介する資料など、生徒が身近に感じやすい展示がされており、見学中も「この獅子舞しってる！地元のやつ！」「（こども文化を紹介した資料をみて）これ懐かしい！」といった発言が多数確認できた。また見学の終盤には、ハンズオン展示やバーチャル着付け（十二単）が体験できるゾーンに生徒が集結し、談笑しながら体験している姿が印象的であった。

生徒からは、「もうちょっと博物館にいたい」「また個人的に来たいです」「時間延長できないですか」などの肯定的な意見が多く確認できた。一方で、事前学習を終えた直後に大型連休（GW）に突入してしまったため、「事前学習」と「博物館見学」の間に２週間ほど時間ができてしまい、連続性が失われてしまった。博物館見学が生徒たちにとって充実した時間になったことが想像できる一方で、博物館や学芸員の役割について事前の想定以上に深めることができなかった。

（３）市民が兵士になる（１時間）

本時では、歴博の刊行物のうち『佐倉連隊にみる戦争の時代』や『国立歴史民俗博物館研究報告第 131 集　佐倉連隊と地域民衆』、『総合誌歴博 189 軍事郵便と戦争・兵士』などをもとに、市民が兵士になるまでの過程をスライドにまとめ解説を行った。兵士として入営し、訓練や兵器・被服等の整理整頓をはじめとした表に出やすい兵営での生活に加え、私的制裁の実態をはじめとした表に出にくい部分についても説明をおこなった。そして、市民が兵士になる（変化していく）過程をつぶさに追った。その際、筆者が所有する召集令状（複製）や出征兵士を送る送辞（実物）なども併せて提示した。

資料１　入営者の歓送記念写真
（出典）『佐倉連隊にみる戦争の時代』p.27



資料２　高所飛び下り訓練などを行う兵士
（出典）『佐倉連隊にみる戦争の時代』p.29

戦争や徴兵を経験していない大多数の国民にとって「戦争」は最大の非日常であり、「戦争」や「有事」を想像することは難しい。ましてや、自身が生まれるはるか昔に終結を迎えた戦争に対して、教科書だけでイメージを膨らませることは困難であろう。現に、生徒におこなった事前の聞き取りからも「戦争があったことは知っているけどよくわからない」「中学校の歴史でもさらっとしかしていない」との発言が多

く確認できた。また、「軍人＝職業軍人」と捉えている生徒の割合が高いことも事前の聞き取りから明らかになっている[5)]。そのため、まずは「軍人＝職業軍人」という既有知識に揺さぶりをかけ、召集兵や志願兵として市民が戦地に向かったことについて説明をおこなった。

（４）兵士たちが置かれた環境（１時間）

本時では、出征した兵士が戦地でどのような状況に置かれていたのかを考えた。

まず、「ゴールデンカムイ（アニメ版）」の冒頭部分「203 高地での戦い」を上映し、生徒が身近に感じる教材から戦地をイメージしてもらった。もちろん、日露戦争→満州事変→日中戦争→太平洋戦争と戦線は拡大していくため、一言に「戦地」といっても同じような環境ばかりではない。よって、①朝鮮半島（漢城）、②満州（新京・長春）、③中国（上海・南京）、④マレー半島、⑤ガダルカナル島の気温や戦線の状況についても説明をおこなった。そのうえで、出征した兵士が置かれた状況について考えた。敵国との交戦はもちろん、ゲリラとの戦い、軍人としての職務、感染症や飢餓の恐怖など、慣れない地での生活の様子についてスライドを用いて紹介を行った。

（５）軍事郵便を読んでみよう！（１時間）

これまでの学習について簡単に復習したうえで、戦地（兵士）と内地（家族・知人）を繋いだ唯一のコミュニケーションツールである軍事郵便を取り上げ、授業を行った。

まず「事前学習」でおこなった表１の流れについておさらいをした。準備が整った段階で、一人一枚ずつ軍事郵便を手渡した（比較的読みやすいものを選択して渡している）。そして、軍事郵便の読み解きのポイントを伝えたうえで、読んでもらった。具体的には、①読めない文字があっても、気にせず文章全体を読んでみる、②どんな内容かまとめてみる、③その人が手紙に託したことを考える、といった手順で読み進めていった。そのうえで、軍事郵便を読んで気づいたこと、考えたことをワークシートにまとめてもらった。以下、生徒の感想を一部紹介する（原文ママ）。

・過酷な環境で体力的にも精神的にも厳しく、いつ自分が死ぬかもわからないなか、家族の身を案じている手紙を書いていることに驚いた。このような状況で家族のことを思えるのは、兵士の人たちは本当に心優しい人なんだろうと思った。

・戦地で戦っているとは思えないくらい優しい、家族を思う言葉がつづられていて、本当はもっと別の書きたいことがあったかもしれないけど、書いてはいけないからと押し込んで、自分もつらいことがたくさんあるやろうに、家族を気にかけているのが、とても健気で苦しかったです。戦争なくなれ。

・戦地の軍人もその家族も厳しい状況の中、唯一心を通わせられるのが「軍事郵便」だと学んだが、そんな手紙さえ戦いのことを一つも感じさせないところが、当時の状況と人間らしさを強く感じる。本当の書きたいことも書けない、慮ることしかできない葛藤もあったのではないだろうか。と同時に、それ程多くの手紙を検閲する人材までいたことで、いかに国全体で戦争をしていたのかと想像もつかない恐怖を思った。

・手紙を送る側も受け取る側もお互い、いつ死んでしまうのか分からない状況下でも、軍事郵便の内容の規制を守りながらも手紙を通して言葉をかわし合っていたという事実に深く感動しました。たわいのない話を手紙に書きとめ、相手に送った後、すぐに戦死された兵士も多いのではないかと思うと、とても切なく、悔しい気持ちで、胸がいっぱいになります。戦争はまともな人間を作れない。そんな中でも、心の支えとして当時の人々の間に行きかっていた軍事郵便の存在はとても大きなものであったことが読み取れました。それと同時に、今も昔も「手紙」という存在は人間にとって、切っても切り離せない大切なものだということを再確認

できました。

・昔の思い出を手紙に書いたり、家族に感謝を伝えていて、辛いなと思いました。怖いと思うのに暗い内容の手紙じゃないのがすごいと思った。

・家族の無事を願う内容が多くあって胸が苦しくなった。相手の心配をしたり、近況を知ることができても、戦地でのことを伝えられてなかったのが悲しかった。どんな状況で手紙を書いているのかが分からなかったら、自分だったら不安になるから、当時は本当に大変だったんだろうなと思った。戦争がないことは幸せだと思った。

・禁止事項が多いためか、家族への思い、心配などの話が多数ある。だからこそ、すごく心に染みる。（軍事郵便は）生きているという信号と、自分が送ったという証拠だったのかもしれない。

・戦況、場所、気候、気温などを書いてはいけないと言う条件の中の手紙を書くのは、とても難しいけど、それ以外の内容で明るく、あたたかく書いているのがとても心にひびきました。

・書く内容も限られている中で、自分の事よりも身内や家族の心配や日常的な事を手紙につづっている優しさや温かさに感動しました。小さな事でもありがたみや幸せを感じれているところが、今ではあたり前の事も意識して生活してみようと思いました。

・自分が明日死ぬかもしれないのに両親、兄弟の心配をしているのが面構えが違うなと思いました。

・今までの思い出がありながら、辛いのに戦争に立ち向かう姿に感動しました。感謝の気持ちを忘れずに、あたりまえじゃないことを覚えておくようにします。

・家族や恋人を心配させないような内容で、少しでも不安を感じさせないのはすごいと思いました。自分だったら家族に会いたいなど書きたいけど、兵士はそれさえ禁止されてて胸がぎゅーっとなりました。

・本当は戦争なんかに行きたくないのに、家族の事を思ってここまで素敵な手紙を書けるのは本当にすごいことだなと感じました。

・今だったら考えられないし、もし今戦争が始まって同じ状況下におかれたら自分はたえられないと思いました。きちんと手紙がとどくように当たりさわりのないことが書かれていますが、手紙を書いている家族の気持ちをそうぞうすると切なく何とも言えない気持ちになりました。手紙を送る途中で中身をすべてチェックされると聞いてプライバシーも一切無いんだなと思いました。

５　本研究の成果と課題

本実践の成果として、主に二点取り上げる。

第一に、従来あまり着目されてこなかった博物館図録や研究紀要をはじめとした博物館の刊行物に着目した博学連携に取り組んだ点が挙げられる。先述したように筆者自身、博物館を活用する最大のメリットは「所蔵資料（モノ資料）」と「専門的知識（学芸員）」だと感じている。一方で、雑芸員の言葉が市民権を得ているように、学芸員も日々多忙である[6)]。加えて、学芸員が配置されていない博物館も少なくない。よって、学芸員をはじめとしたスタッフ、教育委員会などが最新の情報や研究成果をもとに作成した博物館図録や研究紀要をもとに、教材研究・授業開発を行うことで、学校・博物館双方に負担を感じさせずに連携が模索できると考えている。加えて、探究学習の導入に伴い、博物館には生徒や教職員の多様なニーズに応えることが求められている。そうなれば、博物館の館種や学芸員の有無といった点から、地元の博物館や資料館だけでは活用に限界があることが容易に想像できる。全国どこにいても博物館の研究成果を享受できるように、図録や研究紀要を活用した情報収集・教材研究が求められる。

第二に、市民（一個人）の視点から入営・出征までの過程を学習したうえで、軍事郵便の読み解きをおこなった点が挙げられる。手紙を書いた者の背景や当時の社会情勢などをふまえずに、ただの読み物として軍事郵便に向き合うと「手紙を読む」以上の効果は期待できないだろう。そのため、当時の社会情勢はもちろん、一市民が入営してから兵士になるまでの過程を学習したうえで、軍事郵便の読み解きをお

こなった。私たちと同じ一般市民であった人々が、兵士になり戦地に赴いたことを念頭に置いたうえで、資料の読み解きをおこなった。

一方で、課題としては二点挙げられる。

第一に、通信制高校に在籍する生徒や特有の教育システムを考慮した、授業モデルの開発を行う点が挙げられる。例えば、通信制高校では「面接指導（スクーリング）」「報告課題」「試験」「特別活動」の４つに取り組むことが進級・卒業の条件とされており、一般的な全日高校とは教育システムが大きく異なる。よって、それら通信制高校特有の事情を踏まえた授業モデルの開発をおこなうことが求められる。

第二に、博学連携研究員としての課題を述べたい。筆者は、これまで３期６年博学連携研究員を務めてきた。上司や同僚の理解や協力もあり、研究員として充実した時間を過ごすことができた。しかしその間、博学連携や博物館活用の取り組みをヨコに広げることができなかったと感じている。筆者の実践に対し、興味関心を示してくれる教員も一定数見受けられた一方で、多くの教員に対して「研究員という立場だからできた実践」という印象を抱かせてしまったことも確かである。自身が構想した実践をおこなうことに加えて、博学連携の輪を広げていく努力も博学連携研究員として必要であったと感じている。

６　さいごに

戦後 80 年がたち、戦争体験者も年々減少している。教育と研究の立場にいなければ、私にとっても「太平洋戦争」は遠い昔のできごとで、関心を寄せることはなかったかもしれない。本実践で取り上げた「市民が兵士になる」ことも容易には想像できなかったであろう。本実践を受けた生徒も同じだったのではないだろうか。しかし、曲がりなりにも本実践を無事に終えられた一因として、生徒を惹きつける資料と刊行物から得た専門的知識が当時のことをより鮮明にリアリティをもって生徒の目に映し出したことが考えられる。今後も、博物館図録や研究紀要などを活用した博学連携について考えていきたい。

また、本実践で取り上げた軍事郵便には、「生きていること」を家族や知人に伝えるための手紙という側面もあった。新井の論考では、軍事郵便を受け取った家族はもちろん、地域の人も一緒に手紙を読んだことが紹介されている。「郵便が届くうちは、きっと生きている」と信じてやり取りをした軍事郵便は、当時の記憶を後世に伝える大切な証言でもある。軍事郵便に込められた思いを読み解き、戦争の記憶を後世に伝えることが求められていると感じる。本実践が生徒達にとって、戦争の記憶に触れ、向き合うきっかけになれば望外の喜びである。

【謝辞】

本研究を行うにあたり、国立歴史民俗博物館管理部広報課の皆さま、博学連携研究員の皆さまには、資料提供やアドバイスをいただきました。また、昼食時、帰りのバス・電車においても意見交換させていただきました。兵庫から佐倉（千葉）までは遠い旅路でしたが、それを感じないほど充実した時間でした。兵庫県立歴史博物館では、姫路ゆかりの資料をたくさん拝見させていただき、貴重な機会となりました。また、博学連携研究員への応募を快諾していただき、研究員活動中も便宜を図ってくださった専修学校クラーク高等学院姫路校の福永智教校長にも感謝申し上げます。公私にわたって支えてくれた八田眞椰氏にも感謝申し上げます。

【付記】

本稿に掲載されている筆者の所属は 2025 年 1 月 25 日時点のものです。また実践は 2024 年におこなっています。

【註】

1）浅野晋司「『もうひとつの特別教室』であることを目指して～”博学連携”で学習支援課が大切にしていること～」(『兵庫県立考古博物館研究紀要』第８号,2015 年,pp.75-98 収録）より引用。

2）公益財団法人日本博物館協会『子どもとミュージアムー学校で使えるミュージアム活用ガイドー』ぎょうせい,2013 年 p.103 を参照。

3）博情館については、『民博誕生－館長対談－』の梅棹忠夫氏と黒川紀章氏の対談で紹介されている。詳細は、同書 p.152 を参照。

4）博物館に来館した教員が図録や研究紀要に興味関心を示すとは限らず、それら刊行物の積極的な活用も図られていないと感じている。また管見の限りではあるが、博物館図録が学校図書館に所蔵されることも少ないのではないだろうか。教職員が手に届くところに図録を置くことも、学校教育における博物館活用の１つであると感じている。

5）同様の質問を昨年度の卒業生に対しても行ったが、ほとんどの生徒が「軍人＝職業軍人」と捉えており、自ら望んで戦地に赴いていると回答している。

6）拙稿「学校所在資料をおもしろい教材にするために」(『月刊考古学ジャーナル６月号』2023 年，p.19）を参照。

【参考文献】

・新井勝紘「「軍事郵便文化」の形成とその歴史力」『郵政資料館研究紀要』第２号,2011 年、pp.1-17

・小野寺拓也『野戦郵便から読み解く「ふつうのドイツ兵」－第二次世界大戦末期におけるイデオロギーと「主体性」』山川出版社,2022 年

・小笠原喜康ほか（編）『博物館教育論－新しい博物館教育を描きだす－』ぎょうせい,2012 年

・小川慶将『高等学校通信教育規程（令和３年改正解説）』勁草書房，2022 年

・八田友和「学校所在資料をおもしろい教材にするために」『月刊考古学ジャーナル６月号』（783），2023 年,pp.18-21

・八田友和「博物館活動の疑似体験を通じて資料に込められた思いを読み解く実践」『リカレント研究論集』第４号,2024 年,pp.76-89

・藤井忠俊『兵たちの戦争－手紙・日記・体験記を読み解く－』朝日新聞出版，2019 年

・国立歴史民俗博物館（編）『佐倉連隊にみる戦争の時代』国立歴史民俗博物館,2006 年

・国立歴史民俗博物館（編）「特集 軍事郵便と戦争・兵士」『歴博』第 189 号,2015 年

・国立歴史民俗博物館（編）『国立歴史民俗博物館研究報告第 101 集 村と戦場』2003 年

・国立歴史民俗博物館（編）『国立歴史民俗博物館研究報告第 126 集 近代日本の兵士に関する諸問題の研究』2006 年

・国立歴史民俗博物館（編）『国立歴史民俗博物館研究報告第 131 集　佐倉連隊と地域民衆』2006 年

・国立歴史民俗博物館（編）『国立歴史民俗博物館研究報告第 147 集 戦争体験の記録と語りに関する資料論的研究』2008 年

・専修大学文学部日本近現代史ゼミナール（編）『ケータイ世代が「軍事郵便」を読む』2009 年、専修大学出版局

・南丹市立文化博物館・南丹市日吉町郷土資料館（編）『戦争と南丹市～世代をこえて、伝えるメッセージ』2012 年

・南丹市立文化博物館・南丹市日吉町郷土資料館（編）『戦争と南丹市～子どもたちへ語り継ぐ戦争展～』2015 年

・文部科学省『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説－地理歴史編－』2018 年

・TV アニメ「ゴールデンカムイ」公式サイト（2024 年 7 月 28 日確認）https://kamuy-anime.com/

・兵庫県立歴史博物館 ホームページ（2024 年 7 月 28 日確認）https://rekihaku.pref.hyogo.lg.jp/

・未来に残す戦争の記録「軍事郵便とは？」（2024 年 7 月 28 日確認）
https://wararchive.yahoo.co.jp/content/gunjiyubin/guide/